

自己評価報告書(最終報告)

報告者

言語系コース(国語)／田中
大輝

■平成25年度の目標に対する自己点検・評価

I. 学長の定める重点目標

I-1. 教員養成大学教員としての授業実践

中央教育審議会は、「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について」答申したが(平成24年8月28日)、その中で「教員を高度専門職業人として明確に位置付ける」と提言している。この答申の考え方を実現するため、教員養成大学に籍を置く教員として、将来、教師を目指す学生に対してどのような授業実践を展開すればよいか。あなたの取り組みを、①授業内容、②授業方法、③成績評価の三つの観点から示してほしい。

1. 目標・計画

①授業内容

今学年度私が担当する授業は、日本語そのもの(文法、音声、語彙)や言語習得の過程など、日本語(国語)教育を行う者にとって必要不可欠な「知識」の習得を目指すものが多い。これらの項目で身に付けることが求められる専門知識は多岐に渡るのであるが、それらをできるだけ体系的に習得できるよう、以下に挙げる方法を使い分けて授業を行う予定である。

②授業方法

【講義】

教員側が提示せざるを得ない(教員側が提示する方が効率的な)情報等については、自作の配布資料を用いた講義により教授を行う。自作の資料を用いるのは、用例の挙げ方や説明のステップ等を、学生の理解に応じて自由に調整できるようにするためである。

【発表および討論】

辞書的な知識や用例ではなく「考え方」を学ぶことが求められる項目等については、一方的な講義の形式ではなく、学生による発表やそれに基づく討論を行うことで、当該の考え方の妥当性を検証させたり、様々な考え方の存在に気付かせたりすることを目指す。なお、発表においては、事前に発表者と綿密な打ち合わせを行うことで、「どのようにすれば分かりやすい説明(資料)になるか」「どのようにすれば相手を説得できるか」といった「発表(説明)の技術」を育成することも実践したい。

③成績評価

・授業が講義形式の場合、ともすれば学習者は「分かった」気になりやすく、自身の理解度の確認を怠ってしまう場合が多いので、頻繁に小テスト(「知識」としての確認ではなく「理解」としての確認(学んだことを応用できるかどうかをはかる))を行うことで、理解の深まり・定着を助けたい。もちろん、成績評価における小テストの割合は軽くせず、授業全体に適度な緊張感を持たせる。

・発表および討論においては、「発表(説明)の技術」「論理的思考力」「着眼点」を重視して評価したい。また、積極的な発言を促すため、「発言回数(量)」も評価対象とする。

・初回の授業において成績評価の基準を明示し、学生は自身の暫定の成績をいつでも確認できるようにする。

2. 点検・評価

①授業内容、②授業方法、③成績評価、いずれの観点においても、年度目標時に設定したとおりの内容を実践した。

II. 分野別

II-1. 教育・学生生活支援

1. 目標・計画

・昨年度後期から引き続き、外国人留学生の指導教員として、担当留学生の生活・学業のサポートに努めたい。

・また、大学院のゼミと学部のゼミを合同で行い、それぞれ次のような目標を掲げる。

(1) 大学院生

a. 到達目標

学部生の研究や発表に対して助言を与えられるようになる。

b. そのための具体的な目標

- ・自らの研究テーマだけでなく、幅広く言語現象や言語教育の現状に興味を持つ。
- ・自分の考えを分かりやすく伝えるための「説明の技術」を磨く。

c. 教員の支援目標

研究活動に関して「(教員から)学ぶ」という観点だけでなく、「(人に)教える」という観点を持たせることで、自身の理解度や知識量を客観的に把握させられるよう努めたい。

(2) 学部生

a. 到達目標

研究活動というものに慣れる。

b. そのための具体的な目標

- ・様々な言語現象や言語教育の現状の中に潜む謎(疑問)を見つける。
- ・何が謎(疑問)なのか、何が分からないのかなど、不明な点をことばにしてみる。
- ・自分が見つけた謎(疑問)に対して、自分なりの答えを出してみる。
- ・文献などの情報の探し方や調べ方、取捨選択の仕方などを身につける。

c. 教員の支援目標

学生本人の「引っ掛かり」を尊重し、小さな謎でも(すぐに「答え」を提示するのではなく)自分の力で解決することに意義を見出し、大きな謎でも(すぐに断念させるのではなく)実際にその困難さを実感させることに意義を見出すなど、「自ら考える」姿勢を育みたい。

2. 点検・評価

年度目標時に設定したとおりの内容を実践した。また、ゼミ活動においては、他のゼミの学生や修了生にも自由に参加してもらい、幅広い観点からの意見交換を実践した。

II-2. 研究

1. 目標・計画

自身がこれまで最も幅広い側面から観察を進めてきたサエの意味記述を手掛かりとして、話し手がサエ文を発話するまでに至るプロセス、聞き手がサエ文を理解するまでに至るプロセスをモデル化する。そして、その成果をモヤダケなど他のとりたて詞、例示を表すやなどに適用し、モデルとしてより一般的な形に仕上げたい。

2. 点検・評価

・サエの意味記述の分析をさらに精緻化したものを、『語文と教育』第27号(鳴門教育大学国語教育学会)に投稿し、採択された。

・話し手がサエ文を発話するまでに至るプロセス、聞き手がサエ文を理解するまでに至るプロセスをモデル化したものを、『鳴門教育大学研究紀要』第29巻に投稿し、採択された。

・地域日本語教室における、学習者のニーズに基づいた授業実践についての論文を『語文と教育』第27号(鳴門教育大学国語教育学会)に投稿し(共著)、採択された。

・日常生活に直結する日本語を生活者としての外国人に習得させることを目指した授業実践についての論文を『鳴門教育大学授業実践研究』第13号に投稿した(共著)。(3月10日現在査読中。)

・依頼が断られ再依頼を行う場合の日本語と中国語のポライトネス・ストラテジーの違いについて、日本言語学会第146回大会にて口頭発表した(共同発表)。

・地域日本語教室の特性に合った教科書の作成と指導者の養成についての研究計画調書を、科学研究費補助金(若手研究(B))に新規申請した。

Ⅱ-3. 大学運営

1. 目標・計画

昨年度同様、外国人留学生プログラムコーディネーターとして、国際交流チームと連携し、留学生たちが就学・生活その他のような点に困難を感じているのかを適切に把握し、助言を行っていききたい。また、地域連携委員として、公開講座の実施や教育・文化フォーラムの企画等に尽力したい。

2. 点検・評価

・外国人留学生プログラムコーディネーター、地域連携委員、鳴風会幹事、鳴門教育大学振興会理事など、様々な立場から大学運営に貢献した。
・5月、6月、10月の大学院説明会(ともに学内実施分)のコース別懇談会にコース教員の一人として参加し、入学希望者にコースの説明等を行った。

Ⅱ-4. 附属学校・社会との連携, 国際交流等

1. 目標・計画

昨年度同様、鳴門ダイバーシティクラブと共催する鳴門市日本語教室や徳島県教育委員会が進める「帰国・外国人児童生徒サポートシステム開発モデル事業」に携わることで、地域日本語教育や外国人児童・生徒の学習支援に何が求められているのかを把握し、昨年度の経験も踏まえたくえで自らの知識と経験をさらに現場に還元していきたい。

2. 点検・評価

【附属学校との連携】

・「主免教育実習」および「教育実践フィールド研究」などの際に附属学校を訪問し、連携に取り組んだ。
・第1回附属小学校合同研究会(5/29(水))、第57回中学校教育研究発表会(6/7(金))、第60回小学校教育研究会(2/8(土))における附属学校の教員の授業を見学し、国語科の分科会に参加することで、附属学校の教員と知識や問題意識を共有し合うことができた。
・学部附属連絡協議会(6/20(木)、2/27(木))に出席し、附属校園の教員と知識や問題意識を共有することで、連携を強化することができた。

【社会との連携】

・6/29(土)に学内で開講された公開講座「知ってるようで知らないことばの世界 ～日常の言葉を解剖する～」に講師の一人として参加した。
・8/5(月)に学内で開講された「平成25年度 県・大学等連携による教職員研修」に講師の一人として参加し、異文化理解についての教授を行った。
・8/27(火)に、「教育支援講師・アドバイザー等の派遣」により、脇町高等学校(美馬市)にて、「漢字の不思議に迫る」という題目の出張講義を行った。
・公益社団法人日本語教育学会研究集会委員会の委員(四国地区)に就任し、その役割を果たした。

【国際交流】

・留学生3名(学部特別聴講学生)の指導教員として、学習・研究・生活の指導およびサポートを行った。
・4/24(水)から2/12(水)まで鳴門のボランティア日本語教室に参加し、鳴門ダイバーシティクラブやボランティアの学生らとともに地域日本語教育の実践に努めた。
・「帰国・外国人児童生徒サポートシステム開発モデル事業」に携わり、地域社会(特に日本語の支援を必要とする方々)に貢献した。

Ⅲ. 本学への総合的貢献(特記事項)